

## まぼろしの仮名 ヤ行エ段

### 1. まえがき

日本に本格的に漢字が導入されたのは 4 世紀頃とされている。中国においては、もっと以前から漢字を表音文字として日本の地名や人名を表記した例がある。日本で漢字を表音文字として活用し出したのは 7 世紀頃からで、その代表的な文献が「古事記」及び「万葉集」である。古事記及び万葉集ではいわゆる万葉仮名が用いられている(「日本書紀」は、漢文であるが、これにも万葉仮名による歌が記載されている)が、その中には漢字の字音に従って日本語の 1 音節を 1 字ずつ当てているものと漢字を訓読みしているものがある。

小松茂美「かなーその成立と変遷ー」(以下小松)<sup>1)</sup>及び「日本語の世界 5」<sup>2)</sup>によれば、古事記、万葉集及び日本書紀においてア行エ段の他にヤ行エ段にも万葉仮名が当てられている。すなわち、奈良時代には、現代の仮名書きで「イェ」、ローマ字表記で ye、発音記号表記で[je]の発音が存在していた。これらは、のちにア行エ段の音に合流し、現在は使われていない。

### 2. 万葉仮名の漢字音

まず、ア行エ段及びヤ行エ段の万葉仮名を取り上げて、日本漢字音の呉音および漢音、上古(周・秦、紀元前 10 世紀～紀元前 2 世紀)及び中古(隋・唐、紀元 6 世紀～10 世紀、日本の奈良・平安時代)の漢字発音記号、現代朝鮮語ハングルならびに朝鮮漢字現代音及び中世音発音記号の対照表を作成し、各漢字の発音について考察する。

中国では 5 世紀の初め、東晋が滅びて宋が建国されてまもなく、宋は南北に分裂し、南北朝時代に入った。当時の倭国は、南朝を宗主とみなしていたため、流入した漢語は、江南(かつての呉の地)の中国語であった。このときに得た漢字の発音を日本語に音訳したものを「呉音」と呼んでいる。その後、6 世紀末に隋が南北朝を滅ぼし、長安(今の西安)を都とした。7 世紀の初めに隋が滅び、唐が建国された。長安が引き続き都であった。「漢」とは、中国を代表する呼び名であるから、長安人は中国の標準語を「漢音」と称したのである。ここで、日本漢字音を取り上げたのは、各万葉仮名に当てられた音が、呉音および漢音のどちらに近いかわかるためである。

漢字の発音は、倭人が直接現地に赴き習得したものもあるだろうが、大部分は朝鮮から渡来した人々が我が国の官吏や学者に伝えたものと考えられる。ここで注意しなければならないのは、中国語も朝鮮語も古代から現代に至るまで基本的に頭子音+母音+尾子音の構成であったが、日本語は基本的に頭子音+母音の構成で、尾子音は n しかなかった。したがって、漢字 1 文字の発音は、1 音節であるのに、日本語に音訳するときはほとんど 2 音節になったということである。朝鮮からの渡来人は、中国本土の発音を忠実に我が国に伝えたこともあっただろうが、朝鮮での漢字の発音を伝えたこともあっただろう。そういう意味で、下記の表には朝鮮漢字音も記載した。中古の朝鮮漢字音を知りうる文献は皆無に近く、15 世紀中頃訓民正音(ハングル)が公布されて以来、中世の朝鮮漢字音に関する文献がやっと世に出ることになった。

表 1 万葉仮名ア行エ段ヤ行エ段漢字音対照表

行段	万葉仮名 <sup>1)</sup>	日本漢字音 <sup>3)</sup>		漢字発音記号 <sup>3)</sup>		現代朝鮮語ハングル <sup>4)</sup>	朝鮮漢字音発音記号		備考
		呉音	漢音	上古	中古		現代音 <sup>4)</sup>	中世音 <sup>5)</sup>	
ア行 エ段	衣 <sup>KM</sup>	エ	イ	·iær	·iæi	의	ui	'ii	
	依 <sup>KM</sup>	エ	イ	·iær	·iæi	의	ui	'ii	
	愛 <sup>KMN</sup>	オ・アイ	アイ	·äd	·äi	애	ε	'li	
	哀 <sup>N</sup>	オ・アイ	アイ	·ær	·äi	애	ε	'li	
	埃 <sup>N</sup>	アイ	アイ	·æg	·äi	애	ε	'li	
	亜 <sup>KM</sup>	エ	ア	·äg	·ä	아	a	'a	
	榎 <sup>KM</sup>	ケ	カ	käg	kä	가	ka	?	古訓 エ
荏 <sup>KM</sup>	ニム	ジム	niäm	niäm	임	im	zim	古訓 エ	
ヤ行 エ段	曳 <sup>KM</sup>	エイ	エイ	diad	yiæi	예	je	'iæi	
	裔	エイ	エイ	diad	yiæi	예	je	'iæi	
	叡 <sup>KM</sup>	エ	エイ	diuad	yiuei	예	je	'iæi	
	延 <sup>KM</sup>	エン	エン	dian	yiæn	연	jøn	'iæn	
	要 <sup>KM</sup>	エウ	エウ	·iög	·ieu	요	jo	'io	
	遥 <sup>KM</sup>	エウ	エウ	diog	yiæu	요	jo	'io	
	穎	ヤウ	エイ	giueŋ	yiueŋ	영	jøŋ	'iæŋ	
	江 <sup>KM</sup>	コウ	カウ	küŋ	køŋ	강	kang	kang	古訓 エ
	兄 <sup>KM</sup>	クキヤウ	クエイ	hiuäŋ	hiuæŋ	형	hjøŋ	hiæŋ	古訓 エタ
	枝 <sup>KM</sup>	ギ	キ	gieg	gië	기	ki	ci	古訓 エタ
	柄 <sup>KM</sup>	ヒヤウ	ヘイ	piäŋ	piæŋ	병	pjøŋ	piæŋ	古訓 エ
吉 <sup>KM</sup>	キチ	キツ	kiet	kiët	길	kil	kil	古訓 ヨシ	

注) 万葉仮名に付されている K・M・N は、出典を示す記号で、それぞれ古事記・万葉集・日本書紀を意味する。これ以外の万葉仮名は、「日本語の世界 5」<sup>2)</sup>から採った。

漢音・呉音は歴史的仮名遣いによる。

### 3. ヤ行エ段の万葉仮名の音の考察

まずヤ行エ段の万葉仮名について考察する。表 1 の備考欄に古訓が記されている万葉仮名は訓読みなので、他の万葉仮名とは区別して考察する必要がある。「曳」「裔」「叡」の漢音はすべて「エイ」であるが、中古漢字音の発音記号は、すべて音素/y/及び/e/を含むのでこれらの万葉仮名はヤ行エ段の音を表すのにふさわしいと言える。さらに「穎」の漢音が「エイ」であり、中古漢字音の発音記号の末尾に ŋ を含むものの、音素/y/及び/e/も含むのでこれも妥当と言える。その他の万葉仮名「延」「要」「遥」

は、呉音・漢音ともに「エン」又は「エウ」であるが、これらの中古漢字音にも音素 /y/ 及び /ε/ を含むので問題はない。なお、この表の呉音・漢音は、万葉仮名で記されていたものを片仮名に変換したものであり、そのときの「エ」に当たる万葉仮名の発音は [ye] だったはずである。というのは、小松の「万葉仮名一覧」では、音節を五十音順に平仮名及びローマ字で表記しており、ヤ行エ段の音節として「江」のくずし字<sup>6)</sup>である平仮名及びローマ字 ye が併記されており、片仮名は、小松の引用する「片かな字体一覧表」<sup>6)</sup>によれば万葉仮名「江」の旁から採ったものだからである。ただし、万葉仮名の「江」は、表 1 に示すように、漢字音に由来するものではなく、訓読みであることに注意しなければならない。この「万葉仮名一覧」では、万葉仮名の出典を推古、古事記・万葉集及び日本書紀の 3 つに区分しており、ヤ行エ段の音節の万葉仮名は、古事記・万葉集及び日本書紀の欄には記載されているが、推古の欄には記載されていない。奈良時代は 8 世紀で、推古時代は 7 世紀であるが、これは奈良時代以前にヤ行エ段の音が無かったというよりも、文献の数が少なくこの音を表す万葉仮名が発見できなかったといことであろう。

一方、小松の引用する「平かな字体一覧表」<sup>7)</sup>によれば、平仮名や行え段については記載がなく、平仮名あ行の「え」及び片仮名ア行の「エ」がともに漢字「衣」に由来する。片仮名は、基本的に万葉仮名の偏、旁又は一部を採って作られたものであるが、この片仮名ア行の「エ」は、漢字「衣」の画数を減らして作られたものである。

朝鮮漢字音に着目すると、「曳」「裔」「叡」の中世音は [ʔiəi] であり、[ə] は [e] の弱いあいまい音である。このヤ行エ段の音が、中国から直接伝わったのか、朝鮮経由で伝わったのかは分からない。朝鮮語は、時代を経ても発音があまり変化しない言語なので、中古音と中世音とが同じであったと仮定すれば、朝鮮経由で [ʔiəi] が伝わり、日本ではこれを [je] として受け入れた可能性がある。また漢音に見られるように [yiei] が [jei] (現代仮名遣いで記すと [イエ]) として採り入れられた可能性もある。

なお、朝鮮漢字現代音においても「曳」「裔」「叡」は [je] と発音されており、日本のようにこの音が消滅する現象は起きていない。

#### 4. ア行エ段万葉仮名の音の考察

「愛」「哀」「埃」については呉音、漢音ともに「アイ」であり、中古音も ai であって、[ai] の音が [e] の音に転化することはよく観察されるので、日本にこの音が輸入されて以降、音韻変化があつてこれらの万葉仮名がア行の「エ」の音に当てられたことは理解できる。「衣」「依」については呉音の「エ」に基づいて万葉仮名がア行の「エ」の音に当てられたと考えられる。

#### 5. ヤ行エ段の音の考察

奈良時代には、ア行エ段の音 [e] とヤ行エ段の音 [je] とがはっきりと区別されていたが、それ以降これらの音が混同され始め、10 世紀後半にはア行エ段の音がヤ行エ段の音に合流し、江戸時代中期にア行エ段の音に変化したと言われている。

明治 19 年(1901 年)にヘボン式ローマ字で知られる J. C.ヘボン編の「和英語林集成」(以下、ヘボン) <sup>8)</sup> が刊行された。この復刻版のまえがきの後ろにイロハ順の仮名の表が掲載されている。この表の

イ、ロ、ハの段を抜き出すと下記ようになる。

<1>	<2>	<3>	<4>	<5>	<6>	<7>
<i>i</i>	イ	い	以のくずし字	以のくずし字	伊	膽
<i>ro</i>	ロ	ろ	呂のくずし字	路のくずし字	呂	路
<i>ha</i>	ハ	は	者のくずし字	波のくずし字	波	葉

この表の<1>は仮名の発音のローマ字表記、<2>は片仮名、<3>は平仮名になっている。<4>以降は不規則で、<4>の「以」は平仮名「い」の元になる漢字、「呂」は片仮名「ロ」の元になる漢字、「者」は平仮名「は」の異体字の元になる漢字である。<5>の「以」は平仮名「い」の元になる漢字、「路」は「ロ」の音を表す万葉仮名、「波」は平仮名「は」の元になる漢字である。<6>の「伊」は片仮名「イ」が派生する元となった漢字、「呂」は片仮名「ロ」が派生する元となった漢字、「波」は「ハ」の音を表す万葉仮名である。<7>の「膽」は上田萬年他編「大字典」<sup>9)</sup>によれば訓読みの「ゐ」[wi]で平仮名「い」の音と混同している。「路」は「ロ」の音を表す万葉仮名、「葉」は漢字の訓読みの万葉仮名である。イロハ以降の段を見ても、必ずしも規則的な表記になっていないようである。

さて今回の主題であるヤ行エ段の音について見てみよう。へボンは、いろは歌の「有為の奥山今日越えて(うゐのおくやまけふこえて)」の「え」をローマ字で *ye* としている。この *ye* の段は下記のようになっている。

<1>	<2>	<3>	<4>	<5>	<6>	<7>
<i>ye</i>	エ	ゑ	え	ゑ	衣	江

小松の「万葉仮名一覧」では、衣はア行エ段の音を表す万葉仮名になっており、江のくずし字<sup>10)</sup>がヤ行エ段の音を表す平仮名になっている。小松の「片かな字体一覧表」では「エ」及び「エ(*ye*)」はそれぞれ「衣」及び「江」に由来するとされている。小松の「平かな字体一覧表」では「え」の変体仮名として「衣」又は「江」のくずし字が挙げられており、ヤ行エ段については記述がない。片仮名も平仮名も一気に成立したものではなく、幾多の変遷を経ているので、どこかの段階で話し言葉としても書き言葉としても両者の音が混同され、すでに述べたように仮名文字が確立した頃にはヤ行エ段の音[je]のみになり、時代を経て最終的にア行エ段の音[e]に統一されていったということになる。

へボンの和英辞典は、ローマ字引きになっていて、興味深いことには *Ye* の見出しで唯一掲載されているのが「へ」でこれに漢字「方」が併記されている。この英訳として *to, towards* などが挙げられており、例文として *doko ye yuku, where are you going* となっている。この「へ」は、方向を表す格助詞である。古来ヤ行エ段で始まることばは多数あったが、ここでこの「へ」のみ取り上げられているのは、この辞典の発行年が 1901 年であることから、少なくとも江戸時代から明治にかけてこの「へ」に限って実際にヤ行エ段の発音をしていたと考えられる。現代でも新装開店祝いに「～さん江」という看板が掲げられているのを見かけることがあるが、なるほどと思わせるものがある。

さかのぼって、日本イエズス会が、1603 年に「日葡辞書」を刊行しており、現在「邦訳日葡辞書」(1980)<sup>10)</sup>を参照することができる。この辞書はローマ字引きになっているが、ア行エ段の音が *ye* で表

記されており、ヤ行は ya、yu 及び yo しかない。またこの辞書にはローマ字 e で始まる日本語は一切掲載されていない。したがって、すでに述べたように 10 世紀後半からア行エ段の音もヤ行エ段の音も [je] と発音されていたわけである。因みに、この辞書でも YE の見出しで「エ(へ)」が挙げられており、「方向を表す与格の助辞」(ポルトガル語の和訳文)という注釈が付いている。この時代には[e]音が無く、江戸時代中期に[je]がすべて[e]に変化した後も、へボンにあるように助詞「へ」のみがヤ行エ段の音[je]として残存したことになる。

へボンには、英文のまえがきが掲載されており、片仮名とローマ字を併記した五十音図が出ている。これによれば、ア行エ段、ヤ行エ段及びワ行エ段がそれぞれ「エ e」「エ ye」「エ e」となっている。「エ」は、本来ワ行エ段を表す片仮名であるが、へボンではこれをア行エ段及びヤ行エ段の片仮名としているのはなぜだろうか？小松の「片かな字体一覧表」のように、ア行エ段及びヤ行エ段の片仮名が「エ」になっており、ワ行エ段の片仮名が「エ」になっているのが正しいはずである(ヤ行エ段を表す片仮名は以前からなかった)。

## 6. まとめ

結論として

(1)万葉仮名が使われていた時代からヤ行エ段の音[je]が存在し、そして平仮名及び片仮名が確立した頃からア行エ段の音[e]がヤ行エ段の音[je]に合流した。

(2)江戸時代中期に[je]は[e]に変化した。明治時代の初めころまで助詞「へ」は[je]と発音されていた。[je]音が完全に消滅したのはそれ以降である。それに伴ってこの音を表す平仮名である「江」のくずし字<sup>10</sup>も使われなくなった。

## 付録

## 他言語における[je]音

中国語、朝鮮語、英語及びドイツ語では現在[je]音がどのように使われているのかを下記の表にまとめました。

表 2 [je]音を含む中国語、朝鮮語、英語及びドイツ語の音節

発音記号 a)	現代中国語 <sup>11)</sup>	現代朝鮮語 <sup>12)</sup>	現代英語 <sup>13)</sup>	現代ドイツ語 <sup>14)</sup>
je	也、野、業、葉、夜、液など漢字合計 29 文字(拼音は ye で、4 種類の高低アクセントがある)	예		
jeː				je, jeːder, jeːdes
jeɛː				jäːger, jäːhrig, jäːhrlich
jei			yea	
jeg			yegg	
jek			yech	
je:k				jeɡˈliːcher
jel			yell, yelˈlow <sup>b)</sup>	
jelp			yelp	
jem				jämˈmerlich
jen			yen, yenˈta	
je:n		엔		jenˈseits
jep			yep	
jes			yes, yesˈterˌday	
jet		엿	yet	jetˈziːge
je:t		옛		jeːdˈweːder
jetst				jetzt

a)国際音声記号による

b)・は音節の区切りを表す。

この表を見ると中国語では[je]と発音する音節のみが存在し、n [n]や ng [ŋ]のような尾子音が付く音節がない。朝鮮語では、[je]のみの音節と尾子音が付く音節とを合わせて 4 種類ある。英語では[je]のみの音節が無く、二重母音の音節が 1 種類及び尾子音が付く音節が 8 種類、合計 9 種類ある。ドイツ語では、[je]のみの音節と尾子音が付く音節とを合わせて 8 種類ある。

- 1)小松茂美「かなーその成立と変遷ー」岩波新書(1968)
- 2)築島裕「日本語の世界 5」中央公論社(1981)
- 3)藤堂明保編「学研漢和大字典」学習研究社(1998)
- 4)韓国大漢韓辭典編纂室編「教学漢韓辭典」教学社(2001)
- 5)伊藤智ゆき著「朝鮮漢字音研究 資料篇」汲古書院(2007)
- 6)中田祝夫「古点本の国語学的研究・総集編」別冊「略体仮名総合字体表」講談社(1954)
- 7)飯島春敬「古典かな字鑑」書芸文化新社(1997)
- 8)J. C.ヘボン編「和英語林集成」(原本丸善 1901、復刻版講談社学術文庫 1989)
- 9)上田萬年他編「大字典」講談社(初版 1917、復刻版 1976)
- 10)土井忠生他編訳「邦訳日葡辞書」岩波書店(1980)
- 11)松岡榮志他編著「超級クラウン中日辞典」三省堂(2008)
- 12)朱信源編著「標準韓国語辞典」白帝社(2011)
- 13)小西友七他編「英和中辞典」小学館(1980)
- 14)杉山産七他編「標音独和」三修社(1958)

2017.1.21.